

優秀賞 「小児科医の重要性」

スーパー特進・理系クラス

今日、小児科医不足が問題となっている。医学部の中に小児科特選コースがあるわけでもなく、国家試験で小児科専門の試験があるわけでもないため、すべての医学生が医学部を卒業して医師免許証を取得すればどんな科にもなることができる。そして医学生は大学を卒業するときに何かに進むかを選ぶのが通常なので、小児科医が不足しているということは、誰も小児科をやりたがらないということなのだ。ではなぜ内科医や眼科医、皮膚科医などは充分に医師の数が足りているにも関わらず、医学生は小児科を選ばないのだろうか。その原因は大きく分けて二つある。

一つ目の原因是、少子化に対する誤解である。日本の大きな社会問題の一つである少子化に伴い、子供が減少しているがゆえに、小児科医の需要も減少していくであろうという誤った考え方が定着しつつあるのだ。しかし実際には少子社会にあって、少ない子供を大切に育てるという傾向が強まり、かかりつけ医として小児科専門医を選ぶ親が増えている。また、近年マスコミでもさかんに取りあげられているように、小児医療の充実を希望する声は高く、国の方針として住民に対する地方行政サービスの一環として昼夜を問わぬ小児医療の提供が掲げられている。これに伴う地域住民の要望も極めて高くなっている。しかし、医学生には地域保健・学校保健に寄与する小児科医の役割や社会的影響力が理解されていないという現状があるのだ。

二つ目の原因是、小児科医の仕事が厳しいと思われているということだ。法に華は総合医療の要素が強い。総合医療の要素とは、内科のように呼吸器科、循環器科、消化器科、神経内科、血液科など各分野ごとに分かれてそれぞれに充分な数の医師が備わっているのに対し、少ない人員でこれら全ての分野を担当しなければいけないということだ。さらに、日常診療では高い技術が要求されることも多いため、医学生にとってとても厳しく難しい職場であるという先入観があるのだ。また、かつて小児科はきつい・汚い・給料が安いの 3K と言われてきた。大人はちょっとした発熱であつたら薬を飲んで寝て治そうとするが、子供が高熱を出せば親は驚いてすかさず病院へ連れていく。そして、薬をもらって一旦家に帰つても熱が続いたり少しでも様子がおかしかったら再び病院で受診する。その度に小児科医は休日であつても病院へ出てきて対応しなければならない。また、入院中の子供の患者のケアも大人よりも断然手間がかかるのだ。入院中のベットの柵から子供が乗り越えないように注意も必要であるし、長期入院であれば子供の心のケアも必要になってくる。さらによく言うと、子供の血管の方が大人よりも断然細く、注射や点滴一つするのにも神経を使い、精神的にも大変なのだ。汚いという言葉では語弊が生まれるかもしれないが、小児科は主に感染症を扱い、汚物の処理も多いため、汚いと敬遠されがちなのである。さらに、給料面でも厳しい問題があるのだ。診療報酬は薬の処方の量によって決まるため、大人よりも体の小さい子供では必然的に処方量が少なくなり、給料も少なくなる。小児科は他の科と比べて、体力や精神力、忍耐力が必要になるにも関わらず、給料が少ないというのは医者にとって割に合わないのである。

また、厚生労働省が医療費を抑制しようとしたり、2000 年を境に医師過剰になると予測して医学部定員を削減したが、実際には小児科医の絶対数の不足にもつながったという政策の誤りも志願者の減少につながった。しかし、前でも述べたとおり、小児科は総合医療の要素が強いため、優れた小児科医が必要であり、定員数を増やして活動を活発にしなければならないのだ。

では、小児科医が減少するとどのような問題が起こるのだろうか。小児科医が減少することで小児の診療が充分にできなくなることから、少子化がさらに深刻化していくことにつながるのである。これから将来を担う子供が減少していくことで社会的な問題が引き起こされることにもつながり、さらに少子化を加速させていく。こうして、小児科医の減少はこのような悪循環になっていくのである。

このような小児科医が減少していく原因やそれによっておこる問題をふまえて、小児科医を減少させないようにするには、どのような対策をとればよいだろうか。まず、少子化に対する誤解をなくす必要がある。少子化に伴い子供を大切にする意識が強くなるため、小児科医の需要は高まっているということを理解しておかなければいけない。また、小児科は子供の成長や発達を見守り、時代の日本を背負うことになる子供達を健全な成人に育てあげるという大切な使命を担っている。また、小児科がかつて言われてきた 3K ではなくて、夢・喜び・やりがいの 3Y で象徴される科であることを医学生や若い医師に知ってもらう必要もある。

このように、小児科医は未来の日本を担う子供達をそばで見守り、救っていく素晴らしい役割を持っている。そのため、これからさらに小児医療に力を注いでいかなければならない。